神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

Conjugal union as a holy communion : love and faith in paradise lost (Part I)

メタデータ	言語: jpn
	出版者:
	公開日: 2004-09-30
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 西川, 健誠, Nishikawa, Kensei
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/753

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

夫婦の交わり，神との交わり

――『楽園喪失』における夫婦愛と信仰(上)――

西　川　健　誠

（目　次）

Ⅰ　序
Ⅱ　聖なる夫婦愛（第四巻）
Ⅲ　綻ぶ夫婦愛――別離の場面（第九巻前半）
以上「上」）
Ⅳ　失楽と夫婦愛の転落(第九巻後半)
Ⅴ　夫婦の和解，神との和解(第十巻)

Ⅰ

一般に，男女の交わりと神との交わりとは，対極にあるものと考えられる。宗教詩人の作品の中では特にそう捉えられることが多いようだ。男女の愛，ないしは男女の愛を歌った詩は邪まなものと難じられ，神の人間に対する愛，ないしはそれをストレートに歌った詩のみが真実なもの，と断定される。「作り事，髪のみしか詩に歌えないと言う者は誰だ」（'Who says that fictions only and false hair / Become a verse?'）と問うジョージ・ハーバートの言葉はそういう態度の典型である。[1] 男女の交わりは俗，神との交わりこそ聖であり，両者の間にははっきりとした壁がある，と詩人も，その読者も，想定することが多い。

こういう聖俗二元論的な立場にたつと「永遠の摂理を説き，/ 神の人に対する道の正しきことを証す」（'That I may assert eternal Providence / And justify the ways of God to men' [I, 25-26]）ことを目的にしたミルトンの

『楽園喪失』は，男女の愛を歌うことを排した作品である，ということになりそうだ。だが，実際に作品を読むと，必ずしも男女の愛と神への信仰とを対立させてはいないことに気づく。夫婦の間の交わりが，非常に官能的な言葉で描写されている場面がある。そしてそれが聖なるものとして，語り手により弁護されているのだ。夫婦の絆は人間と神との絆の反映であって，二つの絆のどちらか片方が綻べばもう片方も綻び，片方の綻びが正されればもう片方の綻びも正される。両者が競合関係になるのは，いずれかの絆に歪みが生じたゆえに起こることではないか――そうミルトンは考えていたと思われるのである。ではアダムとイブの交わりを人間と神との交わりとの関係の中で詩人はどう描いているか。以下では『楽園喪失』中のいくつかのパッセッジを精読することで，ミルトンにおける夫婦愛と信仰との結び付け方を考えて見たいと思う。

II

アダムとイブが最初に読者へ紹介されるのは第四巻，288-311行においてである。現代の読者から見て当惑を覚えざるをえないのは，二人の差異を指摘した箇所，すなわち

[B]oth
Not equal, as their sex not equal seemed;
For contemplation he and valour formed,
For softness she and sweet attractive grace,
He for God only, she for God in him[.]

（二人は
その性が同一でないように，同一ではなかった。
男の方は瞑想と勇気を特徴として
女の方は柔和さと甘く魅力的な優雅さを特徴として作られていた

男はひとえに神のために，女は男の内なる神のために）　(295-299)

という箇所だ。特に結びの「男はひとえに神のため，女は男の内なる神のために」という句は，「すべての男の頭はキリスト，女の頭は男」という新約聖書中のパウロの言葉（コリントの信徒への手紙第一11:3）に依拠したもので，ある種の上下関係を示唆した言葉であることは否定しようがない。とはいえアダムとイブの関係が専ら硬直的に支配・被支配の関係かといえば，そうとも断定できない。真実とか知恵とか清さ，といった資質は二人共々に見える特徴とされており(293)，またアダムに対するイブの服従は，服従といっても，

Subjection, required with gentle sway,
And by her yielded, by him best received,
Yielded with coy submission, modest pride,
And sweet reluctant amorous delay.
（かれの方も穏やかな支配力をもって求め
彼女の方も，慎みながらも誇りをみせ，恥じらいながら
甘く艶かしげにじらせてみせた上で，差し出す，
そのような時に，かれが最も喜びとするもの）　(308-311)

と形容されるものだからだ。「支配力」にあたる単語に「振動」をも意味する‘sway’という語が用いられていることも注目したい。スティーヴィ・ディヴィスが指摘するように，失楽前のアダムとイブの関係は，神と人間との関係に呼応した垂直的関係であっても，相互の間の「振動，往復」をも排除していない[2]。求めに対してじらしたり，そのじらしをかえって喜んだり，という一種艶かしい(cf. ‘amorous’[311])「駆け引き」が可能な，水平性をも伴った関係なのである。

艶かしさ，ということに関していえば，語り手によるアダムとイブの紹介で私たちの目を引くのは，かれらが裸体であることが強調され，かつ裸体がかれらの

無垢，神々しさと結びつけられている点だ。二人が万物の主と見えるのは「威厳ある裸体を着物として，生まれつきの栄誉が与えられている」（'[The two]... with native honor clad / In naked majesty seemed lords of all' [289-290]）からとされており，その上語り手はその時は「二人の陰部も隠されていなかった」（'Nor those mysterious parts were then concealed' [312]）と二人の裸体性について駄目まで押しているのである。後者の一行は，読者にある種の気恥ずかしさを覚えさせる箇所だが，ミルトンとしては真剣な思いを込めて書いた一行であろう。なぜなら今「陰部」と訳した部分に用いられている mysterious は mystery（「神秘，奥義」）の形容詞形であり，「『それゆえ，人は父と母を離れてその妻と結ばれ，二人は一体となる』この神秘は偉大です」という聖書の文言（エペソ人への手紙5：31-32）を響かせた言葉だからだ。こういう連想を伴う語を用いることで性に神聖さ，宗教的な意味を与えているのである。さらに語り手は

Then was not guilty shame, dishonest shame
Of nature's works, honor dishonorable,
Sin-bred, how have ye troubled all mankind
With shows instead, mere shows of seeming pure,
And banished from man's life his happiest life,
Simplicity and spotless innocence.
（その時は罪ゆえの恥，自然の技を恥じる
不純な恥，不名誉な名誉などというものはなかった。
恥よ，不名誉よ，罪から生まれたお前たちは，真実のかわりに
見せ掛け，うわべの純粋の見せ掛けでどれ程人類を悩ませてきたことか。
人類の生活から最高の幸せである，
一点の汚れもない無垢と純真さを奪ってきたのだ）　(313-318)

という詩行を続けてもいる。裸体に対する羞恥を「罪から生まれたもの」('sin-bred' [315]) と断定し,「純粋さの見せ掛け」('mere shows of seeming pure' [316]) を難じている語り手の声の,驚くほどの真剣さに注目したい。裸体とは肉体の上で飾りを全て剥ぎ取った状態である。これを「無垢」「純真」と結びつける態度は,精神において全ての虚飾をはぎとり,神の前にいわば裸の自己を見せるべきと考えたピューリタンの態度と共通していないか。ローマ・カトリックやイギリス国教会の典礼を評して「純潔の聖衣ではなく純白のリンネルの聖衣で儀式を飾り,アロンの古ぼけた衣装だんすや古代ローマのフラミン僧の祭服室から取り出した祭服,司教冠,黄金,金ぴかの安物からなる,変てこな衣装までもちだしてくる有様」('They be deck't it, not in robes of pure innocency, but of pure Linnnen, with other deformed, and fantastick dresses in Palls and Mitres, gold and guegaw's, fetcht from *Arons* old wardrobe, or the *Flamins* vestry') だと難じ,[3] その虚飾を排撃した論争家としてのミルトンと同種の声が,上の詩行においても聞きとれる。

裸体のアダム・イブの気高さを称えた語り手は,続けて夫婦として睦みあう二人の姿を驚くほど肯定的に描く。『離婚の教義と規律』の中で「神の意図においては,喜ばしくふさわしい交わりが結婚の第一のかつ最も高貴な目的である」('[I]n Gods intention a meet and happy conversation is the chiefest and noblest end of marriage') と記しているミルトンであるが,[4]『楽園喪失』の語り手が描く失楽前のアダムとイブの姿は,このミルトン流の結婚の理想像の体現といえよう。二人の「交わり」(conversation) が会話＝言葉の上の交わりにとどまらず,身体動作を伴うものになっている点にも注目したと思う。例を取ろう。語り手によれば,イブは

> [H]alf embracing [she] leaned
> On our first father, half her swelling breast
> Naked met his under the flowing gold

Of her loose tresses hid. [.]

(一方で抱擁するように

我らの始祖たる夫によりかかった。また一方で

梳られていない金髪に隠して，ふくらんだ胸を

夫の胸と触れ合わせた)　(494-497)

とあり，アダムもこれに答えて

[H]e in delight

Both of her beauty and submissive charms

Smiled with superior love[...] and pressed her matron lip

With kisses pure[.]

(妻の美しさと，

魅力を伴った従順を喜びとして，誇らしげな愛情をもって

微笑んだ[...]そしてイブの唇の上に

何度も清い口付けをした)　(497-499. 501-502)

とある。微笑み，キス，抱擁，という体の動作によって，夫婦は文字通り「触れ」合っている。こういう二人の動作は確かになまめかしく，少なくとも感覚的ではある。それが猥褻に堕していないとすれば，理由はこれらの肉体的接触が，ことばによる交わり，それも教会の礼拝式文からそのまま出てきたような対話の中に埋め込まれているからだろう。イブに口付けするアダムは

[L]et us ever praise him, and extol

His bounty[.]

(たえずあの方を賛美し，あの方

恵み深さを称えよう)　(436-437)

と提案し，アダムの胸元によりかかるイブも

[W]hat thou hast said is just and right,
We to him indeed all praises owe,
And daily thanks.
（あなたのお言葉はまさしく正しいです。
わたしたちはあの方にことごとく賛美と
日々の感謝を捧げる義務を負っております）　(444-445)

と応じている。神への賛美・感謝のことばの間に，男女の愛の動作を織り込まれているのだ。これによりミルトンは夫婦愛を――その肉体的面まで含め――聖化することを狙っているのだろう。夫婦の間の交わりは，礼拝における人と神との交わりに連なる行為だという信念が，この場面における二人の描写に込められていないか。

この点を考えるヒントとして，睦びあうアダム・イブを前にしてのセイタンの反応を見てみたい。裸体の二人を目にしてのかれの第一声は「ああ，何という地獄」（'Oh, Hell' [358]）であり，抱擁しあうかれらから目をそむけて独り嘆く言葉は

Sight hateful, sight tormenting! thus these two
Imparadised in one another's arms
The happier Eden, shall enjoy their fill
Of bliss on bliss, while I am to hell thrust,
Where neither joy nor love, but fierce desire,
Among our torments not the least,
Still unfulfilled with pain of longing pines[.]
（何と憎むべき，胸を苛む光景，ああして，あの二人は

互いの腕の中という，エデンの中でもより幸せなエデンといえる
楽園の中に身を置き，至福につぐ至福を味わうことを
この私は地獄に突き落とされているのに。
そこにあるのは喜びでもなく，激しい欲望のみ，
それは私たちを苛む罰の中でも小さからぬもので，
永久に満たされない焦燥のゆえに，悶えやつれるのだ）　(505-511)

というものだ。「天国で仕えるよりも地獄で支配する」（'Better to reign in hell than to serve in heaven' [I, 263]）と啖呵を切り，神の前に跪くことを拒んだセイタンである(「仕える」を意味する serve は同時に「礼拝」を意味する名詞 'service' の動詞形であることを思い出したい)。この反逆に対して神がセイタンに下した罰が今かれの味わっている地獄（'hell'[508]）であるとすれば，[5] アダムとイブに与えられている夫婦としての喜び，「楽園の中の楽園」（'the happier Eden'[507]）とまで形容されている喜びは，かれらが神を創り主として感謝を捧げていることへの報いということになろう。睦みあうアダムとイブに激しく嫉妬するセイタンの姿を提示することによって，ミルトンは裏側から，夫婦の交わりの喜びは神との交わり方が正しいがゆえに与えられる恵みである，という神学的主張を行っているように見える。

さて，夕餉をすましたアダムとイブは，ひとしきり会話の交わした後，「至福の四阿」（'the[ir] Bower of Bliss' [690]）に赴く。読者の前に最初に姿を現した時同様(321)，二人が「互いの手をとって」（'hand in hand'[690]）四阿へ向かっていくのは興味深い。ミルトンの「至福の四阿」で特徴的なのは，そこがパラダイスという聖なる場所の中でもさらに聖なる場所として提示されている点だ。アクサー・ギボリーが正しくも指摘している通り，ミルトンの「至福の四阿」にはユダヤ教の神殿の中の至聖所（the holy of holies）を思わせるものがある。[6] 神との契約の箱がおかれ神の臨在する場所としての「贖いの座」を含む至聖所は「青，紫，緋色の毛糸，および麻のより糸を使った，意匠家の描いた

ケルビムの模様の垂れ幕」(出エジプト記26:31)により神殿の他の箇所から分かたれている。同様に「至福の四阿」も四方はアカンサスをはじめとする花々の作る「緑の壁」('verdant wall'[697])によって，天井は月桂樹や天人花やさらに背の高い木々の葉がからみあった木陰('inwoven shade / Laurel and myrtle, and what higher grew / Of firm and fragrant leaf'[693-694])によって仕切られているのだ。互いの腕の中にあることで「なお幸せなエデン」('the happier Eden'[508])を味わっている二人の内面を，空間の形で体現した特権的な場所が，この四阿といえるかもしれない。

四阿が至聖所であるならば，至聖所に入ろうとしているアダムとイブは神殿付の祭司に喩えられよう。事実祭司のごとく，二人は四阿に入る前に神へ向かっての祈りをあげている。その祈りの冒頭の部分を引用する。

> Thou also mad'st the night,
> Maker Omnipotent, and thou the day,
> Which we in our appointed work employed
> Have finished happy in *our mutual help*
> *And mutual love, the crown of all our bliss*
> *Ordained by thee*[.]
>
> (全能の作り主よ，あなたは夜も
> 昼に加えてお作りになりました。その昼を，私たちは
> 私たちに与えられた仕事に従事して，幸せに閉じました。
> *お互いの助けと，愛のうちに。それはあなたが定めた*
> *至福のうちの筆頭のものであります*) (724-729，イタリックは西川)

イタリックの部分に注目してほしい。朝を作り，夜を作った神を感謝するだけの祈りであれば，凡百の祈りと変わるところがない。だがアダムとイブは相互の愛，助け合いも神から与えられた恵みとして数え，しかも恵みのうちの筆頭としてい

る（'the crown of all our bliss'[728]）。こう二人に語らせることで，ミルトンはあらためて夫婦愛の聖化を試みていると考えられないか。セイタンに裏側から証させたことを，今度はアダムとイブに，正面から証しさせているのである。さらに言えば「定めた」にあたる部分に，ordain という単語を選んでいる点にも，ミルトンの神学的主張が込められていそうだ。ordain の第一義は「定める，秩序の一部とする」であるが，同時に「聖職に定める」という意味も持ち得る（名詞形の ordination［叙階，按手］になるとこの意味がはっきりしよう）。この解釈をとれば，上の詩行はアダムとイブが「叙階」された「聖職者」なのだ，というメッセージを伝えていることになる。万人祭司説，即ち，結婚生活者は独身の聖職者に聖性の点で劣らないという主張は，ルター以来のプロテスタントの重要な主張であった。ミルトンも他のプロテスタントの思想家同様，万人祭司説にコミットし，夫婦生活に信仰上の意義を与えようとしていたからこそ，「叙階する」ことを意味する ordain という単語を選択しているのではないか。

ユダヤ教の寺院における「至聖所」は，大祭司が民を代表して犠牲を捧げ，神に祈る場所であった。キリスト教になると，教会の「聖域」（sanctuary）はユダヤ教の「至聖所」の伝統を引き，イエスの十字架上の犠牲の記念である聖餐が行われる場所となった。四阿が「至聖所」あり「聖域」であるならば，その至聖所付の大祭司ともいえるアダムとイブが取り交わす肉体の交わり（communion）は，聖餐＝神との聖なる交わり（holy communion）を反映するものとなってもおかしくない。

This said unanimous, and other rites
Observing none, but adoration pure
Which God likes best, into their inmost bower
Handed they went; and eased the putting off
These troublesome disguises which we wear,
Straight side by side were laid, nor turned I ween

Adam from his fair spouse, nor Eve the rites
Mysterious of connubial love.
（こう二人揃って言い，神が最も嘉す賛美以外には
いかなる儀式も執り行うことなく，
奥深くにある四阿の中へ手を繋いで
入っていった。私達とは異なり，着物という
艤装を脱ぐ手間のなかった彼らは
直ちに相並んで横になった。思うに，アダムが
美しい伴侶に背を向けることはなく，イブも
夫婦の間の秘儀を拒むことはなかったであろう）　(736-743)

冒頭の四行（736-739）については複数の解釈が可能である。まず，adoration pure を this，つまり直前に記されていた二人の祈りと解釈することが出来る。アダムとイブの祈りの言葉の前に「二人は直立し，向き直って，遮るものがない空を見上げ神を賛美した」という箇所があり，そこで 'adore' が用いられている(cf. '[B]oth stood, / Both turned, and under open sky *adored* / The God' [720-722，イタリックは西川])。これを受けて言葉による賛美を adoration と呼び直している，と解すことが出来る。だがもう一つの解釈もあり得よう。adoration pure の指すものを740行目以下で書かれていること，つまりアダム・イブ夫婦の体の交わり＝賛美と解するのである。この解釈に従い再度736-739行を訳せば「こう声を揃えていい終えた二人は，夫婦としての体の交わりという，神が最も嘉される純粋な賛美のみを儀式として守るべく，手を繋いであずまやに入った」とでもなろう（adoration pure の実質的な言い換え語である rites が，ほんの六行後に再度登場していること，しかも the rites / Mysterious of connubial love［夫婦愛に発する神秘的な儀式］と，はっきり夫婦の体の交わりを意味する語句の中で登場しているのは，こちらの解釈を支持する有力な根拠となる)。このような ambiguous な構文を通してミルトンが行おうとしているの

は，再び，夫婦の愛の聖化と思われる。からだの交わりはことばによる祈りに何ら劣ることなく「神が最も嘉す／純粋な賛美」たり得る，という信念が，上の七行における詩人の構文の操作から垣間見られる。

上で引用した箇所に続くいわゆる「結婚愛の賛歌」の部分（744ff）になると，語り手の主張は，より直接的で，ほとんど戦闘的と呼び得るトーンを帯びる。裸体を擁護し，失楽後生じた恥の感覚を論難した箇所におけるのと同じ口調で，語り手は結婚愛の清さを徹底的に強調し，逆に夫婦間の性の清さに疑義を抱く者を仮借なく非難している。夫婦の交わりを罪と考えることなどかれには思いもよらず（cf. 'Far be it, that I should write thee sin or blame' [758]），むしろその交わりが適切か否かを詮索する者の方が「偽善者」（'hypocrites' [745]）と呼ばれている。禁欲を説く者に至っては「私たちの破壊者，神と人間にとっての敵」（'our destroyer, foe to God and man' [749]）——すなわちセイタン同然——とまで断じているのである。こういう熱い語り手の口調の中に聞き取れるのは，やはり夫婦愛の清さの可能性へのミルトンの揺るぐ事のない信頼だ。セイタン同様，アダムとイブの間の聖なるエロチシズムを正視することが出来ない「堕ちた」想像力の持ち主を，ミルトンは徹底して軽蔑している。肉体の交わりを含む結婚愛を称揚する語り手の声の背後には，夫婦間の性は独身の修道者の禁欲に劣らず聖なるもの，という詩人のプロテスタント的な確信が控えているのである。

「閨も汝を賛美した」とは，旧岩波文庫『楽園喪失』の訳者である藤井武が自身の作の長編詩『羔の婚姻』の中で記している言葉である。[7] ミルトンが『楽園喪失』第四巻，特に「結婚愛の賛歌」で伝えている思想は，この藤井の言葉と響きあうものであろう。神への愛は聖なるものだが男女の愛は俗なるものと断ずる聖俗二元論的発想を，ミルトンはとっていない。むしろ前者が正しく実践されるとき，後者も価値を持つと考えている。夫婦が心身共に交わる場所が即「生ける神の神殿」（コリント人への手紙第二 6:16）となり，二人だけの小さな教会が成立する，との確信があるといえよう。二人が原罪を犯しかれらの創り主

から離れてしまう時，一時この神殿＝教会は毀たれてしまう。だがアダムとイブが神へと立ち返るきっかけとなるのも，後で見るように，二人の間の交わりなのだ。『楽園喪失』においては，人間と神との関係は，妻と夫との関係と，密に結びついているのである。

Ⅲ

前節で見た通り，失楽前には，神との交わりと夫婦の交わりが重なり合っていた。ことば，さらにはからだを通して夫婦が睦みあうことが，そのまま神への愛と重なっていた。だがこれは逆にいうと，二つの関係の片方に綻びが生じれば，もう片方にも綻びが生じるということだ。原罪が犯されるのはおのおのが禁断の実を食らう瞬間，と考えれば，それまでのアダムとイブは‘sinful’ではない，ということは出来る。とはいえ『楽園喪失』の第九巻の前半を読むと，すでに原罪を犯す前から，二人の間の交わり＝会話がかみ合わなくなっている。この夫婦の交わりにおける軋みは，やはり，神との交わりの破綻を予兆していないか。

アダムとイブの関係に最初の変化が現れるのは第九巻，205行目だ。二人揃って朝の礼拝を捧げるところまではこれまでと変わらないのだが，その直後にイブがアダムに対し，分業を提案しているのである（‘Let us divide our labors’ [IX, 214]）。一緒に仕事をしているのでは木々の剪定の仕事が追い付かないから，というのが理由［cf. 208-212］であり，一見する限りでは他意のない実際的提案と見えよう。だが常にお互い傍近くにいたこの夫婦の間で，「離れる」ことが提案されるのは，やはり不吉なものを感じさせないか。イブは

> For while so near each other thus all day
> Our task we choose, what wonder if so near
> Looks intervene and smiles, or object new
> Casual discourse draw on, which intermits

Our day's work brought to little, though begun
Early, and the hour of supper comes unearned.
（一日中お互いこんなに近しく仕事をすることを
選んでいては，近しく眼差しや微笑みを交し合ったり
あるいは目新しいものを見て何とはなしに
話しこむことになって，一日の仕事の邪魔になり
朝早く始めても成果があがらず，働きに不相応なまま
夕餉の時を迎えてしまいます）） (220-225)

と説明するのだが，彼女は第四巻では「あなたと交わっていると，全てが喜ばしく，時も，季節もその移り変わりも忘れてしまいます」（'With thee conversing I forget all time, / All seasons and their change, all please alike' [IV, 639-640]）と語っていた。これを思い出せば，——そして「交わり」（conversation）が結婚の第一のかつ最も高貴な目的，というミルトン自身のことばをも思い出すならば——，[8] 彼女が夫と視線や微笑，ことばを「交える」こと（'conversing'）をネガティブに捉え始めているのは，気懸かりな変化といわざるを得ない。

イブの態度の異変に対するアダムの反応はまずは冷静である（cf. 'mild answer' [226]）。かれは分業の提案じたいは咎めず，むしろ評価している（'Well hast thou motioned...nor of me shall pass / Un-praised' [229, 231-232]）。交わりが多すぎて嫌であるのなら，短い間離れてもよい，とも述べている（'[I]f much converse perhaps / Thee satiate, to short absence I could yield' [248]）。しかし夫は妻との幸せな交わりが神との交わりに依存していることを忘れていない。天使ラファエルから聞いた話を思い出し，セイタンが自分たちの幸せの破壊を目論んでいること，そして二人が離れ離れになった所を狙う可能性があることを明格に意識しているのである。アダムが

The malicious foe[...]
Watches, no doubt, with greedy hope to find
His wish and best advantage, us asunder[.]
([悪意ある敵が]
私達が別々にいる状態を，願ってもなく好都合と考えて
虎視眈々と窺っている)　(253, 256-257)

と指摘し，さらに

Whether his first design be to withdraw
Our fealty from God, or to disturb
Conjugal love, than which perhaps no bliss
Enjoyed by us, excites his envy more;
Or this, or worse, leave not the faithful side
That gave thee being, still shades thee and protects.
(敵の第一の目論見が，私達の忠誠を神から引き離すことなのか，
夫婦の間の愛——私達の味わっている喜びの中でこれほど
敵の嫉妬心を掻き立てるものはないかも知れぬ——を妨げることか，
このいずれが目論見か，より悪しきことが目論見かはともかく，
お前に生命を与え，たえずお前を守り護るべく忠誠をつくす者の
脇から離れてはいけない)　(261-266)

とイブに説く時，かれのことばに patronizing な部分をなしとは出来ないけれども，表明されている憂慮は見当外れのものではない。実際，楽園の幸福の中でもセイタンが特に嫉妬しているのが夫婦愛であり，二人が睦む姿を見てセイタンは「何と憎ましき，何と胸苛む光景」(cf. 'Sight hateful, sight tormenting! [IV, 505]) と呪っていたのは，前節で見た通りだ。

自分のもとを離れぬように諭すアダムに対してイブが返す言葉を，読者はどう解するべきか，瞬時迷う。夫への受け応えは甘く滑らかなものとは言い難くなっていて，いささかの険しさがあるからだ。例えば

> But that thou shouldst my firmness therefore doubt
> To God or thee, because we have a foe
> May tempt it, I expected not to hear.
> (けれども，神に対するのであれあなたに対するのであれ
> 私の忠誠を試みる敵がいるからといって
> その忠誠心をお疑いになるとは思いもしませんでした)　(279-281)

と夫に心外の意を漏らし，あるいは

> Thoughts, which how found they harbor in thy breast,
> Adam, misthought of her to thee so dear?
> (あなたにとり慕わしい筈の女について，誤解をなさり，
> そんな思いを胸に抱くとは，アダム，どういうことです?)　(288-289)

と夫に問う時，これまでのイブの言葉の表面には顕れていなかった自負心のようなものが聞き取れる。悪魔の誘惑に抗するのに必要な勲（merit）が自らには備わっていて，この勲への誇りが傷つけられたという感じ，英語でいえばinjured sense of merit が彼女の言葉から聞き取れるのだ。ではこういう感覚を称賛すべき独立心の表現と見るべきか，それとも警戒すべき傲りと見るべきかとなると，語り手自身にも迷いが見える。語り手はイブが「甘美ながらも厳しい落ち着きをもって」（'with sweet austere composure' [272]）答えたと記しているが，「厳しい」（'austere'）という語は問題である。austere の原義は「渋さと酸っぱさないしは苦さとを合わせた」

('uniting astringency with *sourness or bitterness*' [*OED*[2], austere, 1: イタリックは西川]) 味であって，この意味を取ると「甘美な」(sweet) という言葉の持つポジティブな連想と相反する。だが他方で語り手はイブに「落ち着き」('composure' [272]) があるとし，彼女を「処女の威厳を持ったイブ」('the virgin majesty of Eve' [270]) とも形容している。イブの語調の厳しさに不安なしとはしていないが，彼女の独立心に惹かれてもいる。つまり語り手自身が揺れているのである。

アダムは再度イブを説得しようと試みる。「妻というものは，危険や不名誉をもたらす事態が潜んでいる時には，夫の傍にいるのが相応しいし，最も安全だ」('The wife, where danger or dishonor lurks, / Safest and seemliest by her husband stays' [267-268]) という，いかにも教訓めいた恩着せがましさや勿体ぶりが大きく出た言い方がイブのプライドを傷つけたことを意識しているのだろうか[9]，「お前が見ていることが力となって，あらゆる美徳が増す」('I from the influence of thy looks receive / Access in every virtue' [309-310])，あるいは「お前が見ていると / お前に負けては，お前に上を行かれては恥ずかしい，という気持ちになり / この上なく気力が湧く」('[T] hou looking on, / Shame to be overcome or overreached / Would utmost vigour raise' [312-314]) という具合に，今度はイブの面目を立てる言葉遣いをしている点が興味深い。妻がいることで夫も強くなれる，という論理を使うことで，夫婦の関係の中にある相互性・水平性を前に出そうとしている。「一人でも完璧足り得る」と主張するイブに対し，アダムは「連帯において強さがある」(strength in togetherness) と答えているかのようだ。[10]

しかしイブはこの説得に納得しない。むしろ自分の忠誠心を過小に評価されたように ('Less attributed to her faith sincere' [320]) 受け取っている。322-341行目の彼女のことばからは，「わが魂は怯懦ではない」('No coward soul is mine') と叫んだ，エミリー・ブロンテと同種の語調が聞き取れる。

If this be our condition, thus to dwell
In narrow circuit straitened by a foe,
Subtle or violent, we not endued
Single with like defense, wherever we met,
How are we happy, still in fear of harm?
But harm precedes not sin: only our foe
Tempting affronts us with his foul esteem
Of our integrity: his foul esteem
Sticks no dishonor on our front, but turns
Foul on himself: then wherefore shunned or feared
By us? who rather double honor gain
From his surmise proved false, find peace within,
Favor from Heav'n, our witness from th'event.
And what is faith, love, virtue unassayed
Alone, without exterior help sustained?
Let us not then suspect our happy state
Left so imperfect by the Maker wise,
As not secure to single or combined.
Frail is our happiness, if this be so,
And Eden were no Eden, thus exposed.
(乱暴なのか，狡猾なのかはわかりませんが，こんな風に
敵から狭い範囲に押し込められて生きなければいけない，
しかも，どこで誘惑にあおうとも，一人でその誘惑に十分抗するだけの
力は与えられておらず，たえず危害に怯えてなければいけない，
それが私達の境遇であるなら，どうして幸せといえましょう？
とはいえ危害の後に罪が来るとは限りません。私達の敵は
私達の誠実さを侮り，誘惑することで私達に面と向かい泥を塗ろうと

します。けれども侮ることで私達の面に不名誉を着せるどころか，
かえって自分の顔を汚すのです。ならばどうして私達が
避けたり，怖れたりする必要がありましょうか。むしろ
敵の目論見が外れることで，心の内には平安を得，
この結果を照覧になる天からは引き立てを得ることで
二重の栄誉を得ることになるのです。
それに，試みられた時に外から助けられずも独力で
守れないような信義や愛や美徳に，どんな意味があるのです？
ですから，私達のこの幸せな境遇を，賢いはずの創り主が
一人でいようが，二人でいようが，安心とはいえぬような
不安なものにした，とは考えないようにいたしましょう。
もしそんな不安な所であるならば，私達の幸せも儚いもので，
危険にさらされているようでは，楽園も楽園とはいえません）

（322-341）

ミルトンが『言論の自由』の中で「勇んで敵を求めるどころか，競争からこそこそと逃げ出すような……逃避的な，回廊の中に閉じこもった徳を，私は称賛しない」（'I cannot praise a fugitive and cloister'd virtue...that never sallies out and seeks her adversary, but slinks out of the race'）と記していることは有名である。[11]「試された時に外から助けられずに，自分一人で守れないような信義や愛や美徳に，どんな意味があるのというのです?」（'And what is faith, love, virtue unassayed / Alone, without exterior help sustained?' [335-336]）とアダムに問うイブの中に，『言論の自由』におけるミルトンが見せたとの同じ凛とした強さ，試練に進んで向かっていく度胸があるのは間違いない。だがこのイブの言葉の中に――さらには『言論の自由』におけるミルトンの言葉にも，であろうが――，強さと同時にある種の強がりも感じ取る読者もいるはずである。[12] 加えていえばミルトンは，「回廊の中に閉じこもった徳」

を批判する一方で，名誉心を「高貴な心の持つ最後の弱さ」（'that last infirmity of a noble mind'）と評したことも思い出したい（'Lycidas,' l.71）。目下のコンテクストにより引き付けて考えれば，「一人で立つ」ことの雄々しさが次第にイブの思考を大きく占めていく中，「二人交わる」喜びが彼女の視界から後退しつつあるのではないか。そんな懸念を，読者としては持つのである。そして「二人交わる」喜びが彼女の意識から消えるのにあわせ，彼女と神との交わりにも軋みが生まれているようだ。「たえず危害を怯えていなければいけないのに，どうして幸せといえましょう？」（'How are we happy, still in fear of harm?' [325]）と問う彼女の言葉，あるいは「このように危険に晒されているのでは，楽園も楽園とはいえません」（'Eden were no Eden thus exposed' [341]）と断じる彼女の言葉は，plain とは言いがたい。片方は修辞疑問文，もう片方は仮定法であって，どこか作為的で修辞的な響きを持っている。これはイブが創造主の配剤に疑問を挟みはじめていることばの上の証ではないか。少なくとも，創造主から与えられた条件を，自然には受けとめられずにいるように見える。[13]

アダムは今一度説得を試みようとするけれども，結局自由な選択を理由にイブに自らの元より離れることを認める(343-375)。失楽前の夫婦の会話で最後の言葉を語るのは妻である。アダムとイブはまだ罪を犯してはいない。だが「二人であることの強さ」を重んじるアダムと，「一人だけになったときの強さ」を重んじる二人のやり取りが，調和というよりは不調和に終わっているという印象は拭えない。「感情のコントロールの不十分さが，二人の会話を破壊(sabotage)した」というルワルスキーのコメントは的確といえよう。[14] そしてかみ合わずに終った会話がことばの上の「交わり」の綻びであるとすれば，身体動作における「交わり」も綻び始めている。アダムの元から離れるときにイブは「夫の手からそっと自分の手を離した」（'[F]rom her husband's hand her hand / Soft she withdrew' [385-386]）。二人が読者の前に姿を現した時も（IV, 321），「至福の四阿」に入る時も（IV, 738-739），二人は互いに手を握っていたことを思い出

してほしい。握られた手が夫婦としてのアダムとイブの幸せのシンボルであり[15]，かつ夫婦の絆が人間と神の間の絆と不可分のものであるとすれば，二人の手が離されたことは人間が神から離れることを予兆していると言わざるを得まい。そして二人が再度手に手を取るのは，エデンを後にする時である（XII, 648）

（以下「下」）

注

本論文は日本ミルトンセンター第75回研究会(2003年7月4日，於同志社女子大学)における研究発表('Marital Love as a Model for True Worship: A Reading of *Paradise Lost*, Book IV')に加筆修正を加えたものである。

『楽園喪失』からの引用は，Alastair Fowler ed., *Milton: Paradise Lost* (1968 ; London: Longman, 1998) による(以下ではFowler と表記)「リシダス」からの引用は，John Carey ed., *Milton: Complete Shorter Poems* (1968: London: Longman, 1997) による。その他の作品からの引用は，個別の注を参照のこと。訳は特記がない限り，西川による。聖書からの引用は『新共同訳』(日本聖書協会，1989) による。

1. George Herbert, 'Jordan(I)' from John Tobin ed., *The Complete Poems of Geroge Herbert* (Harmondsworth: Penguin, 1993), 50
2. Stevie Davies, *Images of Kingship in "Paradise Lost": Milton's Politics and Christian Liberty* (Columbia, MO: U of Missouri P, 1983), 200. なお佐野弘子氏はデイヴィースの評を引きながら，この箇所についてさらに詳しい読みを示している。佐野弘子「ミルトンの愛の詩」(辻弘子他『神，男，そして女——ミルトンの「失楽園」を読む』[英宝社，1997]所収)，61-64.
3. *Of Reformation,* The First Book. Don M. Wolfe, ed., *Complete Prose Works of John Milton,* Vol. 1 (New Haven: Yale UP, 1953), 521, 訳文はミルトン著，原田純・新井明・田中浩訳『イングランド宗教改革論』(未来社，1976) による。
4. *The Doctrine and Discipline of Divorce,* Vol. 1, Chapter 2. Ernest Sirluck, ed., *Complete Prose Works of John Milton,* Vol. 2 (New Haven: Yale UP, 1959), 246.
5. この箇所についてコーンズは「強制された禁欲は，本質的な功であるどころか，堕天使に相応しい罰なのである」('Enforced sexual continence, far from being inherently meritorious, is a punishment fit for fallen angels') と記しているが，適切な評であろう。Thomas Corns, *Regaining Paradise Lost* (London: Longman, 1994), 37. また，ターナーは，嫉妬するセイタンの姿を端的に描いたものとして，最初の挿絵付の『楽園喪失』(1688) におさめられた，メディナ (J. B. Medina) の手になる角を生やしたセイタンの図像を紹介している。James Grantham Turner, *One Flesh, Paradisal Marriage and Sexual Relations in the Age of Milton* (Oxford: Oxford UP, 1983), 259.
6. Achsah Guibbory, *Ceremony and Community from Herbert to Milton: Literature.*

Religion and Cultural Conflict in Seventeenth-Century England (Cambridge: Cambridge UP, 1998), 206-207

7. 藤井武『羔の婚姻』　藤井武全集第一巻（岩波書店, 1972), 383.
8. 注4参照
9. ルワルスキーは問題の句を「陳腐で勿体ぶった句」(pompous platitude) と評している。Barbara Lewalski, *Paradise Lost and the Rhetoric of Literary Forms* (Princeton: Princeton UP, 1985), 234
10. George Mussacchio, *Milton's Adam and Eve: Fallible Perfection* (New York: Peter Lang, 1991), 81
11. *Areopagitica*, Ernest Sirluck, ed., *Complete Prose Works of John Milton,* Vol. 2, 515 マッコリーはこの文言を含め, *Areopagitica* 中のミルトンの言葉を引用しながら, アダムと別れる前のイブの言葉をキリスト教的な自由観にのっとった正統的発言と見ている (Diane McColley, *Milton's Eve* [Urbana: U of Illinois P, 1983], 141-186)。詳しい分析ではあるが, これまでのイブの言葉にはなかった力みや修辞性を軽視している点, 筆者はマッコリーの分析に賛成できない。具体的な批判は(注13)を参照。
12. 例えばルワルスキーはイブの言葉の中に,「絶対的な自律性を求めるサタン的な主張」('Satanic claims to absolute autonomy') のエコーを聞き取る, と記している。Lewalski, 235.
13. マッコリーは「イブは注意深く自分たちの境遇について神を咎めることを避けている」('She is careful not to blame God for their condition') と記している(McColley, 179)。イブの言葉の表面的な意味をとれば, 問題の発言はマッコリーの指摘の通り, 神の配慮への信頼の言葉かもしれない。しかし「これで幸せといえましょうか」という疑問文を用いる時, あるいは「危険にさらされているならばエデンはエデンといえません」と仮定法を用いる時, イブは修辞の上で, 楽園が幸せでない可能性, エデンがエデンではない可能性, つまりは創造主が賢く「ない」可能性を意識的にか無意識的にか想定してしまっている。これは今までのイブにはなかったことであろう。そこに危険を見て取たからこそアダムは「熱っぽく」('fervently'[342])反論しているのではないか。この点をマッコリーは見落としているように思う。
14. Lewalski, 216
15. Fowler, 491. Mussacchio, 81.